

総括コメント

セシル坂井

今回、大変すばらしく、おもしろく皆様のお話を聞かせていただきまして、今日、ごく短く、総括をさせていただきたいと思えますけれども、一応断っておかなくてはならないのは、私はクィア・スタディーズの専門家ではないので、私のコメントというのは外側から見たクィア・スタディーズと日本文学ということでご理解いただきたいと思えます。

そして、序文といいますか、最初に一言だけ、直接的には関係はないのですけれども、私はフランスから来ておりますので、我々がこのような会議を行うことのできる枠組である表現、批評の自由ということにおいて、一昨昨日のパリの風刺週刊誌『Charlie Hebdo』のテロ攻撃が、実際にも、それから象徴的にも、大変重大な事件であったことをお伝えしたいと思います。ご存じのように、12人の雑誌社の編集者、記者、それから風刺画家が殺されたわけで、その後の人質事件はやはり多くの犠牲者を出して解決されたばかりです。これは、ヨーロッパやアメリカにおけるアルカイダというテログループとの大戦争の一コマであるというふうに言えますけれども、それ以上に言論の自由を敵にしたということは、我々の今生きていますグローバルなこの日常においては非常に深刻なことだと思います。事件の起きた水曜日には10万人のフランス人がデモ行進を行いまして、今週の日曜日にはまた大きなデモがパリで行われますけれども、そのときには大統領も参加して、多分100万人ほどの人が集まるだろうというふうに言われております。それが結束して、民主主義、それから表現の自由というものを守っていく必要性を改めて確認しました。

さて、クィア・スタディーズのほうに戻りますけれども、それも多少はもちろん関係しています。なぜかといいますと、今でこそ普通に討議されていても、昨日ヴィンセント氏がおっしゃったように受難の時期を経由しているということは忘れてはならないと思えます。理論や研究がもとから社会の編成にコミットしている、そういう顕著な議論の展開の例であるからです。

それからもう一言、これはフランスでのクィア・スタディーズ、クィア・セオリーに言及したいのですけれども、実を言いますとフランスではかなり消極的といいますか、遅れをとっていると一言わざるを得ません。逆説的なのは、当初のミシェル・フーコー、あるいは歴史におけるフィリップ・アリエス、あるいはフェミニズムセオリーのジュリア・クリステヴァ、エレヌ・シクスー、リュス・イリガライのような中心的な理論を開拓してきた人たちがフランス出身であるにもかかわらず、アメリカでその後育った、いわゆるフレンチ・セオリーという名前の元に、その末裔にありますポスト・ジェンダー・セオリーのクィア論が逆輸入されていないという実情があります。具体的な例を2つ申し上げますと、イヴ・セジウィックの『Epistemology of the Closet』（『クローゼットの認識論』）は1991年にアメリカでは発表されていますけれども、それは何とフランスでは2008年に、つまり17年後に初めて翻訳されているわけです。それから、

ジュディス・バトラーの最も有名な『Gender Trouble』（『ジェンダー・トラブル』）に関しては、1990年発表ですけれども、2005年に初めて仏訳されたという非常な遅れをとっています。もちろん、特にバトラーに関しては、その後かなり多くの作品が翻訳されていますけれども、イヴ・セジウィックに関しては、昨日インターネットで調べた限りでは、2つほどしかありません。従ってそういう意味では、一般の例えばフランス文学とかフランス思想における影響力は少ないと言わざるを得ません。もちろんフランスの英米関係の専門家たちにとっては割合と重要な位置を占めていますが、ほかの分野では余り影響力がないというふうに言わざるを得ません。全体的にセクシュアリティ論というのは、文学研究ではフランスでは精神分析によって扱われ、そのほか医学とか心理学、つまり自然科学のほうに流れていっている、そういう傾向があるかと思えます。

もう一つのパラドックスは、現実のフランス社会というのは非常に進んでいまして、その変遷と比べますと例えば、昔と言えらるぐらいの1999年よりパックス (PACS) という同居パートナー契約において同性の契約は認められていますし、それから同性結婚というのもの、昨年ですけれども、法律によって完全に承認され、今では数多くの結婚している同性カップルが生まれています。家族制度全体がとても大きく変化している国であるということは皆さんご存知でしょう。でも、理論のレベルでは停滞しているという現状があると思えます。それはなぜなのかという問いがやっぱりあるかと思えますけれども、フランス発のいわゆる大理論がアメリカから逆輸入されることを余りフランスの知的層は好まないといいますが、余りよい反応を見せないということがあるのと、それからもう一つはクィア・スタディーズ、あるいはゲイ、レズビアン・スタディーズもそうですけれども、コミットメントが中心にあるわけで、それに対する理想としての客観的、学術的、普遍的な研究というもの（フランスでも全領域で脱構築はされていても）がどこか対立し続けている、と言えらると思えます。

問題提起ですけれども、やはり各国の文化の理論の土台というものがあるのではないかと、それが違うからその理論の変遷というのが変わってくるのではないかと。つまり理論のパラダイムというのが普遍的でなくてはならないのかどうかというのが一つの問題提起ですね。現に、やはりアメリカ経由で、ほかのヨーロッパの国でも比較的順調に受容されたポストコロニアル・スタディーズとかカルチュラル・スタディーズというのはフランスでは余り人気を得なかった。あるいは10年、15年の時間を置いて改めて再興されたというような、少しメタ思想的な観測が可能にはなっていますけれども、その最前線を走っているというふうには全く言えないというような状況があります。

それで、提案ですけれども、日本流のクィア・スタディーズというものがあり得るか、どのようにそういうものを発掘していくことができるだろうかというようなことを、皆さんと考えて行く事が出来れば、と思えます。

最後になりますけれども、依頼されました総括に入ります。今回の国際会議はクィア理論、クィア・スタディーズと日本文学の関係を考える初めての大きい試みということで、非常に画期的だと思います。また、全部で15本以上もありました発表はそれぞれおもしろく、大変いろいろな探求のさまざまな形を我々に提出してくれたと思えます。

ただ、何度かお話に出てきましたけれども、クィアというのはかなり広い定義があるため、

アプローチも重層的になっていると思います。昨日上野先生がおっしゃった、社会学自体がブラックボックスであるという表現は、実はクィア・スタディーズ自体にも当てはまります。ある意味では、ほとんどあらゆる研究アプローチというのはブラックボックスであるとも言えますが、文学研究の現在の危機、これはヴィンセント氏の言葉でしたけれども、それを打破するための方法の1つであることは間違いないと思います。1つには、今まで目が届かなかった作品あるいはテーマ、例えば今日午前中の博士課程の学生さんたちの性交というアクションの表象に関する考察、これを今の日本文学の研究の中で直接的に扱った研究というのはとても少ないと思います。それから、それこそヴィンセント氏の行った浜尾四郎の再研究、そういうふうな今まで埋もれていたような作品あるいはテーマを浮上させるというメリットもあると思います。もう一方では古典的、あるいは古典自体でも可能ですが、そういう canon となっている作家とか作品に新しい解釈を与えることができます。これは漱石で試みられ、そのほかにも、例えば川端研究でもそうですし、また江戸川乱歩などはあきらかにクィア・フレンドリーと言わざるを得ない、これからその方法で研究していくかある作家であると思います。異性愛、ヘテロ・セクシュアリティ、さらにゲイやレズ研究の規範自体を解体して、新たな視野を発掘していくことに大きなメリットがクィア・スタディーズにあると思います。

ところで、クィア・スタディーズというのは、90年代から90年後半の歴史的コンセプトというふうに考えた場合、やはり考察のサイクルからいいますと今後のことを考えていかななくてはならないかと思っています。それは先ほど引用されていましたが、theyではなくて、so they and whereということになるかと思っていますけれども、そこで皆さんの議論を期待します。私の見るところでは、発展性のあるのは、やはりクィア・スタディーズ、クィア・リサーチと、ほかのアプローチとのインターディシプリナリティ、あるいはトランスディシプリナリティで、そのような傾向の発表もありましたけれども、例えばクィア・スタディーズ・アンド・トランスレーション・スタディーズ、あるいはクィア・スタディーズ・アンド・レセプションセオリーズ、それからコミュニティセオリーズ、フィクション論、これは可能性の世界などとクィアを考えた場合におもしろいと思います。それから映像・画像論や、現在私たちが生きていますデジタルターンとクィアのアプローチ、これは先ほどのクレア・マリィ先生がお話になったテーマとも全くぴったり合うと思いますけれども、これらの細分化と深化を経て、新しい光のほうへ向かっていくのではないかと期待しています。

ただ、その条件としては、政治的な文脈や経済的なまなざし、後期資本主義の中での文学という表現体系がどのようにこれから変わっていくのかということを中心にかなり広く考えていかないと、長期的な、効果的なアプローチとしては、限界に達してしまうのではないかという危惧があります。皆さんはどうお考えでしょうか。

